



# イチジクの樹体ジョイント仕立てを開発

— 早期成園化と台木の利用に適しています —

## 開発の背景・ニーズ

樹体ジョイント仕立て法は、隣接する樹の主枝を連結して直線状の集合樹にする新しい栽培法です。早期成園化や栽培管理の省力・簡易化が期待できるため、全国で様々な樹種で適用に向けた試験を行っており、愛知県では、イチジクに適した技術の開発に取り組みました。

## 成果の内容

イチジクの樹体ジョイント仕立て法は、1.2m程度の間隔で苗木を植栽し、主枝の連結をすれば、翌年には樹形が完成して果実を生産でき、収穫2年目には約3t/10aと成園並の収量を得ることができます。

近年、イチジク株枯病抵抗性台木を利用した栽培技術が導入されています。台木を長くすると感染しにくいため、従来の仕立て法では主枝の位置が高くなってしまいます。樹体ジョイント仕立て法は、斜立により主枝を連結することができるため、主枝高を40cm程度に低く抑えることができ、病害発生の抑制にもなります。



イチジクの樹体ジョイント仕立ての生育

上：主枝の連結直後  
(○印は連結部)

下：収穫期



活着した連結部

## 愛知県農業への貢献

イチジクの成園化までの期間を短縮することができ、収益性が向上します。従来の仕立て法である一文字整枝と配列が似ているため、産地への導入が容易です。

愛知県は、全国有数のイチジク産地であり、産地の維持強化に貢献できます。

【農林水産省「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業」で実施した成果です】